

# 中世オック語における主語の転換現象について

Conversion du sujet en Occitan Médiéval

後藤 斉  
Hitosi GOTOO

## 0. はじめに

本稿は中世オック語において文脈に依存する程度が高いことを示そうとするものである。それを例証するために主語の転換現象をとりあげる。すなわち、主語人称代名詞がない動詞の主語を正しく解釈するためには、その文内の統語的情報だけでは不足であり、先行する文からの情報、しかも、統語論に属さない情報が必要となることもある。

## 1. 主語の転換現象

「主語の転換現象」という術語は一般的に使われているものではないので、まず、それを定義しておくことが必要であろう。

そもそも他の多くのロマンス語と同じく、中世オック語の動詞は人称代名詞の主語を必要としない。このことはロマンス語としてはあまりにも当然であるため、あまり注目されない。最近刊行された中世オック語の文法書は統語論も比較的詳しく扱うが、そのことには簡単に触れるだけである。すなわち：

“Non-expression of the subject is the norm in Occitan since its distinctive verbal endings are the only elements needed to convey the grammatical notions of person and number.” (Jensen 1986: 86)

“The distinctiveness of most OP verbal inflections usually suffices to indicate the person and number of the subject. Hence, the subject pronoun is used mainly for the sake of clarity, contrast, emphasis, or possibly metrics.” (Smith and Bergin 1984: 111)

しかし、動詞の語尾が指示できるのは主語の人称と数にすぎず、同じ人称と数に属する多数の指示物がある場合、そのうちのどれがかかわっているかを明示することはできない。一人称、二人称の場合にはそのようなことはありえないが、三人称で、しかも、特に単数ではそのことが問題となる可能性がある。すなわち、三人称単数で指示されるべき人物が複数登場してきている場合、動詞の語尾だけではそのいずれが意図された主語の人物であるか判断できないはずである。

ここで、主語の同一指示性といった規則によって説明がつくとすれば、話は簡単である。例えば、(1)において

(1) E lo vescons, lo seus seingner, de Ventadorn, s'abelli mout de lui e de son trobar e de son cantar e ∅ [=lo vescons] fez li gran honor. (VI, A, 4)

等位接続されている後半の文の動詞 *fez* には主語が明示されていないが、前半の文の動詞 *s'abelli* の主語と同じである。このような例が数多いことは事実である。

しかし、主語の同一指示性によっては説で明きない例も少なからずみうけられるのである。(2)において

(2) Et el fes lo.y recebre e Ø [= ?] lay muri. (LIX, Bba, 8)

後半の文の動詞 *muri* の主語は前半の主語、すなわち *el* によって示される人物と同一人物であろうか？ 後に詳しくみることにするが、実は、*muri* の主語は前半の文の直接目的語 *lo* で示された人物なのである。

このように、等位接続された二つの文の動詞がともに三人称単数であって、後半の動詞には主語が明示されていないが、その主語が前半の動詞の主語とは異なる場合のことを主語の転換とよぶことにする。なお、等位接続には、接続詞なしで文が並置されている場合も含む。ただし、議論を単純にするため、従属節が間にはさまっている場合は考慮に入れないことにする。

テキストには Boutière et Schutz 編の「トルバドゥール評伝」*Biographies des troubadours* を用いる。オリジナルの散文というその性質が本稿での考察に適していると考えられるからである。また比較的短い単文を連ねることが多いという、この作品の文体上の特徴もここでの目的にふさわしい。

## 2. 主語転換の成立要因

前節において定義した主語の転換現象がどのような条件において可能になるのか、その成立の要因をさぐることにする。

### 2.1 トピック

明示されていない主語が前の文の主語との同一性によってのみ規定されるのではないとするならば、ここではトピックが大きな要因として働いていることがまず考えられる。実際、中世オック語において機能的文展望 (perspective fonctionnelle) による分析がきわめて有効であることは、つとに Combettes (1970) が指摘しているところである：

Il nous a semblé intéressant d'appliquer certains de ses principes à des textes d'ancien provençal.  
(Combettes 1970: 293)

彼の分析は、中世オック語の語順を決定する要因として、主語／動詞／補語といった文法関係のほか、テーマ／レーマといった発話の構成 (organisation de l'énoncée) のレベルも重要であることを示した。主語の転換現象においてもトピックが要因として働いていると予想することは十分な理由がある。

#### 2.1.1 主人公である場合

「トルバドゥール評伝」のそれぞれのテキストはその性質上、特定の詩人の生涯ないし詩作のいきさつなどを扱っている。すなわち、それぞれのテキストには、他の登場人物より大きなウェイトをもって語られる主人公が明確に存在している。このような主人公はそのテキスト全体を通してトピックとしての取り扱いを受けているとも考えることができる。

実際、主人公が意図されている主語である場合が主語の転換現象の生起例の大部分を占めている。そのごく少数の例を挙げると：

(3) Marcabrus si fo gitatz a la porta d'un ric home,..... E N'Aldrics del Vilar fetz lo noirir.

Après Ø [=Marcabrus] estet tant ab un trobador que avia nom Cercamon qu'el comennset a trobar.  
(III, B, 3)

(4) Et ella l'acuilli fort e ill fetz grans bens. Et Ø [=Peire Rogier] s'enamoret d'ella e fetz sos vers e sas cansos d'ella. Et ella los pres en grat. E Ø [=Peire Rogier] la clamava <Tort-n'avez>.  
(XL, 4-7)

(3)においては直前の文の直接目的語が転換された主語として現れている。(4)はそれより多少複雑で、主語の転換が2回連続して起きているが、いずれも ella すなわち Ermengarda 子爵夫人から主人公である Peire Rogier へ転換している。1回目は直前の文において直接目的語および間接目的語として現れていたのであるが、2回目では直前の文には Peire Rogier を指す語句はない。このように、直前に表現されていないものであっても転換した主語となりうることはこの現象の大きな特徴である。

### 2.1.2 局所的なトピック

前節で見たように主人公がテキスト全体のトピックとして扱われていると考えられるのであるが、センテンス単位でのより局所的なトピックに関しても主語の転換がみられる。

(5) Bertran de Born si era drutz d'une domne gentil e jove e fort prezada, et Ø [=une domne] avia non ma domna Maeuz de Montaignac, moiller d'En Talairan,..... (XI, C, 1)

(6) E.l vescons de Ventadorn si avia moiller, joven e gentil e gaia. E Ø [=moiller] si s'abelli d'En Bernart e de soas chansos e s'enamora de lui et el de la dompna. (VI, A, 5-6)

ここで特徴的なのは、これらがいずれも、新しい登場人物を導入した直後に、その人物について一層詳しい説明をするために使われている文である。この機能は、もちろんこれ以外の構文、例えば関係節によってはたされることも多い。

(7) Lo vescoms de Saint Antoni si fo de l'evesquat de Caortx, seinger e vescoms de Saint Antoni. Et amava una gentil domna qu'era moiller del seingnor de Pena d'Albeges,..... (XVII, B, 1-2)

主語転換の文と関係節との平行関係は、中間的な段階を考慮すればさらに明らかになる。(8a, b) は2つの写本の対応するテキストである。

(8a) En Guillemls [sic] si avia un compaignon, qe avia nom Peire de Barjac, valent e pro e bon e bel. Et Ø [=Peire de Barjac] amava el castel de Jaujac una dompna ajove e bella,..... (XLVIII, a, 5-6)

(8b) G[uilhem] si avia .i. companho, per nom P. de Barjac, valens e pros. Et Ø [=Peire de Barjac] amava el castel .i. avinen dona, Na Viernenca,..... (XLVIII, b, 5-6)

(8a) は第1文に関係節が挿入されているため、主語転換の例とみなすかどうか微妙な場合である。形容詞 valent 以下は直接 un compaignon を修飾していると考えられるので、関係節は Peire de Barjac で終わっていることになる。とすれば、第1文と第2文の主節が連続しているので、主語転換の例とみなしてもよい。しかし、一方、熟語 aver nom は後ろに主格が来ることからも明らかのように、esser と非常に近い。したがって、関係節が第1文の末尾まで続いているとみなすことも不可能ではなく、さらには、句読点のつけかたによっては、“un

compaignon, qe avia nom....., et amava.....”と、第2文まで関係節の中に含めてとることもできる。(8b)は意味的には非常によく似ているが、統語的にはまったく異なっていて、第1文の後半は関係節ではなく、同格の句と形容詞だけである。すなわち、これは明らかな主語転換の例である。このように、対応する2つのテキストの一方が主語転換を示しており、もう一方が関係構造との中間的な段階を示しているということから、主語転換が、新しい登場人物という新たに設定された局所的なトピックに対するコメントとして機能していることが明らかになる。

## 2.2 結束性

「トルバドゥール評伝」に見られる主語転換現象の大部分の例は、2.1でみたように、トピックが関与していると考えれば説説明がつく。上で保留しておいた(2)の場合も、後半の部分の主語はそのテキストの主人公(Perdigon)なのであった。しかし、この場合に、別の要因が関与しているとも考えられる。前半と後半との結束性(cohesion)である。

(2) Et el fes lo.y recebre e  $\emptyset$  [=lo=Perdigon] lay muri. (LIX, Bba, 8)

(2)の前半において、主語である彼(Lambert de Monteil)は目的語の彼(Perdigon)をそこ(シルバペーラの修道院)にひきとってもらったことが語られる。すなわち、Perdigonと「そこ」とが結びつけられる。そして、後半では「そこ」を意味する同意語であるlayが現れている。したがって、後半でも「そこ」と結びつく人物はPerdigonであると解釈できるのである。

このように、主語転換の前後に同じ表現、または同義語・類義語、もしくは意味的に密接に関連した表現が重ねて現れるのがもう一つのパターンとして顕著である。例えば：

(9) E'N Blacatz l'onora e.l fetz grans bens. Longa sason  $\emptyset$  [=Cadenet] ac gran ben e gran honor. (LXXX, 9-10)

(10) En Miravals la.ill dona per moiller, et anaisi  $\emptyset$  [=Guilems Bremon] la.n mena via. (LVIII, D, 39)

(11) Lonc temps ac gran joia d'ella e gran benanansa, entro q'ella tolç lo rei Enric d'Angleterra per marit e qe  $\emptyset$  [=lo reis Enrics] la.n mena outra lo braç del mar d'Angleterra. (VI, B, 12)

このように結束性が二つの部分の密接な関連を保証している場合、明示されていない主語の判断が容易である。(9)においては、grans bensの繰りかえしによって、後半の主語はそれを受けた人物であると判断できる。(10)と(11)はいずれも前半で結婚のことが話題になっているので、後半の動詞la.n mena「彼女をそこから連れて行った」の主語はその夫であることがわかる。

2.1および2.2で見たことからいえることは、主語の転換が純粋に統語的な要因によるのではなく、むしろ、トピックや結束性といった談話のレベルでの要因が重要なはたらきをしているということである。

## 3. あいまいになるばあい

上で見たように、主語の転換現象に談話のレベルでの要因が大きく関わっているとすれば、明示されていない主語が前文の主語と同じであるのか、それとも主語の転換が起きていて前文の主語とは違っているのかを決定す

するためには、言語内および言語外の文脈について十分な知識が必要だということになる。しかし、この種の情報は、時代を隔てた現代人にとってはもちろんのこと、ほぼ同時代の人々にとっても必ずしも常に明らかな形であたえられているわけではない。したがって、時として、その判断が不確かにならざるをえないこともある。例えば、(12)において

(12) E'N Guillems de Berguedan si l'acuilli; et Ø [=?] enansset lui en son trobar, en la primera canson qu'el avia feita. E Ø [=Guillems] fetz lo joglar,..... (LXIII, A, 10-11)

第2文の明示されていない主語が Guillem であることには、その意味から判断しても、疑いがない。しかし、第1文の後半にある明示されていない主語は Guillem と Aimeric de peguillan とのいずれであろうか？

ここで Boutière-Schutz は Aimeric が主語である、すなわち、主語の転換が起きていると解釈する。

(13) Guillem de Berguedan l'acuillit, et Aimeric l'exalta en ses vers, dans la premiere chanson qu'il avait faite. Aussi Guillem le fit-il jongleur,..... (Boutière-Schutz 1973: 427)

確かに、Aimeric はこのテキストの主人公であるから、ここで主語の転換が起こってもおかしくはない。また、この解釈は Egan (1985: 33) の解釈でもある。しかし、これでは、第2文で再び Guillem が主語になっていることの説明をつけにくい。

ここで、Guillem を enansset lui の主語とすることはできないのであろうか？ このほうが第2文とのつながりの上からはよりよいように思える。Liborio の解釈はこうであらうか？

(14) E Guillem de Berguedan lo accolse; e lo esaltò, lui e i suoi versi, nella prima canzone che aveva composto. E lo spinse a essere guillare,..... (Liborio 1982: 203)

現代イタリア語としては、ここで主語の転換がおきているということはあまりありそうにない。もっとも、これが代名詞を表現しないということまで含めての全くの直訳であるという可能性はあるので、彼が積極的にこの解釈を採用したとは必ずしもいえない。とはいえ、内容の点からは、Guillem もトルバドゥールの一人であるから、詩を作って相手を賞賛することはありうる。これに該当しそうな詩はいずれの詩人の作品としても現存していないのであるから、あながち、不当な想定ではない。

中世の写本の伝統のなかに、実は、この解釈を積極的にとっているものがあるのである。Boutière-Schutz の注によれば、A写本とR写本とは主語として Guillem を明示的に表現している。

(15) En guillems lenansset lui e son trobar en la primieira cansson qel fetz, quel li donet son palafre e son uestir A, An g. de bergedan que laculhi el enansset son trobar e det li mot R (Boutière-Schutz 1973: 426)

このような異文がテキストの伝統のなかでどのように生じたかは即断できない。しかし、A写本とR写本という系統上特に近くはない2つの写本が Guillem を主語とみなしたということは、この解釈が十分成立し得るものであることを示している。

すなわち、(12)の例は、談話のレベルでの十分な情報がない場合には、主語の転換が起きているか、そうでないか、判断できないこともありうることを実証している。

#### 4. 結論

本論で示したように、中世オック語では、主語人称代名詞が使われていない場合、その主語は前文の主語と同じであることもあるが、前文の主語とは異なることもある。そして、後者の場合、トピックや結束性といった語用論上の要因が大きな役割をはたしている。言語内的、および、言語外的な文脈に依存する程度が高い、と言ってもよい。そして、この性質は、本稿では扱えないが、中世オック語の別の面でも現れている可能性がある。それを研究することによって、中世オック語をよりの確に捉えることができるようになるであろう。

本稿は、1989年5月27日、文化女子大学で開かれた日本ロマンス語学会第26回大会における発表をもとにしたものである。

#### 参考文献

- Boutière, J. et A. H. Schutz (1973), *Biographies des troubadours, textes provençaux des XIIIe et XIV siècle*. 2e éd. Paris: Nizet.
- Combettes, B. (1970), "Remarques sur la structure grammatical et l'organisation thématique de la phrase dans les vies de troubadours" *Actes du VIème congrès international de langue et littérature d'oc et d'étude franco-provençal (Montpellier, 1970)*. tome II, 293-308.
- Egan, M. (1984), *The Vidas of the Troubadours*. New York: Garland.
- Egan, M. (1985), *Les vies des troubadours*. Paris: Union Générale d'Édition.
- Jensen, F. (1986), *The Syntax of Medieval Occitan*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Liborio M. (1982), *Storie di dame e trovatori di Provenza*. Milano: Bompiani.
- Smith, N. B. and T. G. Bergin (1984), *An Old Provençal Primer*. New York: Garland.